第８回京都市未来共創チーム会議
議事録

日　時：令和７年７月１日（火）１６：００～１９：００
会　場：QUESTION７階 Creative Commons

出席者：
（委員）

池坊 専宗	華道家・写真家
伊住 禮次朗	茶道総合資料館副館長
大井 葉月	京都市職員（産業観光局）
大竹 莉瑚	市民公募委員
杉田 真理子	一般社団法人 for Cities 共同代表/都市デザイナー
田口 成人	京都市職員（都市計画局）
都地 耕喜	EVER 株式会社 代表取締役
仲田 匡志	株式会社 SOU 代表取締役/U35-KYOTO プロジェクトマネージャー
三川 夏代	株式会社メルカリ 『mercari R4D』

（その他）
佐藤 尚之（※）　コミュニケーション・ディレクター/株式会社ファンベースカンパニー取締役会長

※　京都市未来共創チーム会議開催要綱 第６条第２項に基づき招集

１　開会

２　議事

（１）　「京都基本構想（仮称）」の周知に向けた取組について

司会

議題に入る前に１点連絡がある。６月１３日に開催された第７回京都市総合計画審議会において、「長期ビジョン（仮称）」の名称を「京都基本構想（仮称）」とすることが確認されたので、お知らせする。

本日は、佐藤尚之氏にもお越しいただき、前回に引き続き、「京都基本構想（仮称）」の周知について議論していただきたい。

それでは、議論に入る前に、松井市長から、一言御挨拶をお願いする。

市長

第７回審議会における議論を経て、パブリック・コメント案が概ね完成した。前回の未来共創チーム会議において意見があったように、少し人格性のある文章であるため、それを万人に全部読んでもらうことより、皆さんが感じた基本構想の中身を、余白も含めて皆さんの友人たちにどのように説明していただくか、そしてそれを様々な方にどのように受け止めてもらうのかということが重要である。多くの方々に京都のまちの在り方を考えてもらう大切な機会にしていただきたい。

本日お越しいただいた佐藤氏には、先ほど本市職員に対し、「ファンベース」とは何かについて研修を実施していただいた。「ファンベース」とは、京都のまちを本当の意味で愛してくださる方々の愛をどのように受け止めて、その方々の意見をどのように捉えて、京都のまちがさらに愛されるようにするにはどのようにすべきなのかということである。１つ間違えると、本当に愛される人から見放されるようなまちにもなりかねない。万人に愛されることはなかなかなく、一方皆さんの周りにも本当に京都のことが大好きな人たちがいらっしゃると思う。そういった方々に、これまで議論したものをどのように伝えていくのが良いのかについて、皆さんと意見交換していただきたいと思い、佐藤氏にお越しいただいた。

本日は、基本構想が策定された後、皆さんがどのように伝えていくかということについて御議論いただきたい。よろしくお願いする。

司会

それでは、資料２について説明させていただく。

（資料に基づき説明）

全体で議論する前に、３分間、２人組で個別にディスカッションする時間を設けたいと思う。

―３分間個別対話―

司会

それでは、伊住委員と田口委員から話した内容を共有していただきたい。

田口委員

文章の人格性を伝えるためには、コピーしたテキストでも良いが、肉筆で書いた方がより伝わるのではないかという話をしていた。

伊住委員

文字表現として伝える時には、肉筆で書き込むビジュアル的な強さがあると、惹きつけられるのではないかと思う。

田口委員

話が戻ってしまうが、私が気にしているのは基本構想の浸透についてである。たくさん読んでもらえば良いという話ではないと思うので、読んだ人がどのように思ったり、どういった動きをしたりすることを期待するのかと考えてみると、「X with 基本構想」の「X」に何を置くのかは変わってくるかもしれない。

ファンベースについては、私もファンカルチャーに興味があり、「ファンダム」などと言われる人たちは、例えばアイドルを核にして、文化そのものをつくっているが、そのようなことが基本構想で起きるとはどういったことなのか考えてみたい。

伊住委員

先ほどの佐藤氏の研修の中で、１０人の中に２人のファンがいるとすると、今までのアプローチは、残り８人の興味のない人たちに対して、いかにアプローチして、ファンを増やすかということに注力していたが、今はそれが届かない時代になっているから、その２割のファンの人たちに、どれだけ価値を感じてもらえるか、より充実した体験をしてもらうかということに努力した方が良いという話があった。

この基本構想も、興味がない人は全く興味がないし、そのような方に簡単に届けられるはずがないので、諦めるという話ではないが、２割のファンをターゲットの中心に置くのが良いかもしれない。この基本構想を浸透させていく対象が誰なのかということは、このタイミングで整理できると良いかと思う。そうすると、先ほど田口委員に話していただいたところも少し整理できていくのではないか。広がりを持って浸透していくことを考えると、初めに力を入れて発信していく対象は、２割のファンとするのが良いのか考えたい。

司会

誰の肉筆で書くのかということもある。野村特別委員なのか、未来共創チーム会議委員なのか。

伊住委員

例えば、誰か適した書家の人に完全にコミットしてもらうのも良いのではないかと思う。

司会

続いて、大竹委員と大井委員に、話した内容を共有していただきたい。

大竹委員

これから大学等で出前パブコメを実施されるということで、私も学生なので、学生をターゲットにどういったことが考えられるのか話していた。講義で取り扱う他に、自主ゼミがあったり、それも新たにつくったりできるので、そのような場に持っていくことも良いかと思いつつ、そもそもこの基本構想自体を、多くの学生は知らない。そう考えた時に、２割のファンに対してアプローチするという話があったが、基本構想に２割もファンはいないというのが現状だと思う。私たちはコミットしたから、愛着があり、ファンになっているが、市民からすると、完成した基本構想をいきなり見ても、そこで愛着を持ち、ファンになるのは難しいと思う。

その中で、どのようにムーブメントをつくっていくのかが重要だと思うが、最初から広く届けるというよりは、京都に対して既に想いを持っている人を中心にした方が良い。私の身近なところでは、苦情や要望を言ってこられる地域の年配の方がいる。苦情や要望も興味や関心があり、愛があるからだと思う。そういった京都に対する想いの強い方々に基本構想を届けると、良い意味で想定外の動きが起こりそうで、イベントベースでは広がらない広がり方になりそうで面白いと思う。

大井委員

私たちは、これまで複数回の議論を経て、基本構想を少しは理解できているかもしれないが、受け手の方たちは予備知識が全くない状態なので、いきなりこちらが「X with 基本構想」と言っても、うまくいかないと思っている。まず、こちらが発信するばかりではなく、相手が何をやっているかということを知ることも重要である。「基本構想を考えよう」と持ちかけるのではなく、相手の話を聞く中で、基本構想のこの部分に通じるかもしれないというように、私たちが拾っていく必要があるのではないかということを話していた。

また、京都市では「これからの１０００年を紡ぐ企業認定」という取組をしており、その認定企業の方たちと話す中で、認定を受けることがゴールではなく、そこからがスタートだと思っているとおっしゃっていたのが印象的であった。そういった方々を巻き込むことが重要だと思う。

司会

続いて、仲田委員と都地委員に、話した内容を共有していただきたい。

都地委員

私と仲田委員は起業や、新たな産業を創る上での支援に取り組んでいる点において共通しているので、「X」の部分には、エコシステムやスタートアップといったワードを入れられるのではないかという話から始まった。

また、前回の未来共創チーム会議において、話題に上がった人格性について、アイドル的なものになるのか、それとも身近な憧れのようなものにするのかとなると、私は後者をイメージしている。そして、基本構想を伝えていく語り部が、ある意味でその人格の表れになると思う。語る際には、基本構想の人格が語り部となる私たち自身の人格としても統合されていくという感覚を持って伝えたり、そのような姿勢を見せたりする必要がある。そういった姿勢で、エコシステムをつくっていくための活動やイベントを提供していくと、それに共感する人たちが自然と集まり、共感しない人は勝手に離れていくと思うが、つながった人たちでどのようにその先をつくっていくかということが重要である。

関係性を大切にしていきながら、その規模を大きくしていくことが京都らしいエコシステムにつながり、それが余白にもつながると思う。そういった部分を、起業をサポートする私たち自身がしっかり理解して体現していきたいという話と、社会実装に向けて失敗しても挑戦できる環境をつくることができると良いという話になった。

日本では、まだ投資ファンドの規模もそれほど大きくない。ただ、その中で、やはりスタートアップは非常に短期間で、出口戦略に関するマイルストーンを出してくる印象である。しかし、京都は社会実装をすることに対する思いが強い方など様々な人がいると思う。お金がないのであれば、きちんと時間を取ってあげることによって、１つの技術だけではなく、別の技術に転用できるかもしれないという思考も生まれるかもしれない。そういった余白があることによって、別の発想ができる余裕も生まれてくるはずである。

語り部として広げていくことによって、短期間でマイルストーンを設定するなど出口戦略を求めるのではなく、ある程度時間的なゆとりや、失敗したとしても、もう一度別の案で挑戦できるような環境をつくっていくことができるのではないかと思った。

仲田委員

時間軸が京都らしいという意味では、昔の琵琶湖疏水事業に関しても、琵琶湖の水を京都に引っ張ってくるという困難なことをきちんと時間をかけて実現し、結果として、現在の資産として残っている。長く残るものを大切にするというバックグラウンドが、この京都基本構想にあると思う。そういった背景を伝えられると良いかと思う。

あとは、基本構想でどうやって遊ぼうかと考えていた。肉筆で書く場合も、序文を１０人の作家が書くと違いが出て面白いかもしれない。

司会

続いて、杉田委員と池坊委員に、話した内容を共有していただきたい。

杉田委員

私たちは、最近どこに行ったか、どんな人と会ったかといった雑談が主であった。このチームだからこそ、こういった雑談から出てくる言葉は非常に大切だと思っているので、「X」に何を入れるかという議論に繋げると、私は具体的な言葉を入れたいと思う。基本構想自体が壮大なものであるからこそ、「X」の部分には、「これなら今話せるホットなトピックだよね」というような、フックになる言葉が適しているのではないだろうか。その具体的な言葉は、若い世代で様々な分野で活動しているチームだからこそ、たくさん出てくるのではないかと思っている。

先ほどの雑談の中で出てきたのは、アフリカとリープフロッグだが、それこそ「市民とクレーム with 基本構想」なども面白いと思う。出張でタイに行った際に、暑さ対策や京都における暑さについて話していたので、「夏の暑さ with 基本構想」というテーマでも話してみたい。具体的な言葉やトピックの方が、参加してくれる人が思い浮かぶと思う。

池坊委員

私は最初、「X」に何を入れるかと考えた時に、ここにいる皆さんでも良いし、今来ていただいている市民や行政の皆さん、あるいは、朝、軒先を箒で掃いているおばあちゃんでも良いかと思っていた。しかし、京都市の陰と京都基本構想を重ねるなど、温暖化や水も「X」に入る可能性があるということを考えていくと、杉田委員は具体的なものが良いとおっしゃったが、私は抽象的な概念も入れることができると思う。そもそもこの「X」に何を入れたとしても、京都基本構想が包摂的な文章であるから、何かは出てくると思う。

何かを当てはめれば、その自分の映し鏡のように何かが出てくるという意味では、この「X」は未定の方が面白いのではないだろうか。全てを制約するよりも、何を入れても答えが返ってくるような変数としての「X」の意味もあるかと思う。そこに何を入れるかではなく、別の次元から見た方が、この「X with 基本構想」の幅が広がるとも思った。例えば、「楽しむ基本構想」や、「巡る基本構想」、「考え抜く基本構想」、「いとおしむ基本構想」。逆に、集まった人が基本構想から何かひねり出すなど、行為やアクションというレイヤーで、この「X」を捉えても良いのではないだろうか。誰を入れるかとなると、全て同じ感じに聞こえてしまう。

杉田委員

雑談から一人一人違ったトピックが出てくるように、「X」が変数であるということで、例えば、この人はこの１０の「X」を持って今話したいといったこともできるかもしれない。

司会

続いて、三川委員と松井市長に、話した内容を共有していただきたい。

三川委員

まず松井市長からは、先ほどのファンベースに関連して、熱量が生まれるのは全体の２割であり、その２割のコアなファンを育てることによって、コミュニティとして育つという話

があり、具体的な事例として錦市場を挙げられた。私は最近錦市場に行った時に、非常に観光寄りになっているという印象だった。観光客にとっては魅力的なスポットかもしれないが、住民にとってはそれで良いのかという問いもある気がする。

２割のコアなファンは誰なのかという話になるが、京都に来る観光客にとって魅力的な場所なのか、それとも京都に住む人たちにとって魅力的な場所に育てていくのかという部分は大きな分かれ目かと思う。私は松井市長の話を聞いて、この会議が始まった当初に「My Favorite Kyoto」というシートを書いたことを思い出した。２０５０年にも残したいお気に入りの京都について発表するというものであったが、京都に住んでいる人、もしくは少し関わった０．１市民など一人一人にお気に入りの京都があると思う。

その京都に対する愛は、それぞれあって良いと思う。そこに対する熱量がどうなのかということであり、多くの人に自分の京都愛を肯定されるのか、それとも１人でも良いので、共感してくれるかどうかなのかだと思う。それぞれの京都愛を誰かに語った時に理解してもらったり、もしくは一緒に体験してもらったりすることを通して、「あなたの京都愛は、つまりこのようなことだね」と肯定してもらうプロセスを経て、結果的に「基本構想の中のこういったところにも通じそうだね」というように、後から意味付けされていくのではないだろうか。

つまり、「X」の部分には、シンプルに京都愛のような熱量が生まれる火種となる部分が当てはまり、それをどうみんなに理解してもらうのか、どう伝えていくのかという How の部分が複数あるというイメージである。How の部分は、あえてふわりとしていて良いと思っている。京都愛を伝えたい人たちが、伝わるように How を考えて、それを語り部の人たちが手伝ってあげることで、京都愛が語られる、伝えられる、体感できる場所や機会を増やしていくと、自然と基本構想も周知されていくのかと思った。

松井市長

例えば、今日のニュースに出ているように、イノダコーヒーがキーコーヒーの傘下になった。こういった個人の喫茶店のような場をどうしていくのかといったことでも良いと思う。自分にとって大切な京都をどのように残していくのが良いのかということを、それぞれに議論していただく中で、基本構想ではこう書いているが、我々はどうしていくべきなのかということを考えていただきたい。

池坊委員がおっしゃったように、あえて禅問答的に抽象的な概念から入って、参加するメンバーがその概念を解釈し、この基本構想に繋げても良い。他にも、京都には銭湯を愛している人がたくさんいるわけで、銭湯は我々のまちから見たらどういった存在なのか、その銭湯が少なくなってきている現状を、我々はどうすれば良いのか、基本構想に何かそういったことを書いていないだろうかなど、参照するものとしていただきたい。

要するに、皆さんと少し違う立場である私としては、税金を使って、多くの人に参画していただいて策定するからには、京都のことを大好きな人たちに、基本構想を見ながら、京都のこのようなところを残していこうという議論をしていただきたい。基本構想がその議論の材料になることを期待しているし、基本構想に書いていることで、１つでも２つでも、具体

的にこうしてほしいという話が出ると素晴らしい。人数は少なくても良いから、価値観などがどこかで繋がっているような人たちが集まって、銭湯や喫茶文化など個別のテーマで、どのように自分たちの好きな京都を将来につないでいくのか、そのために何をするのが必要なのかということを考えていただきたい。

場合によっては、墨守するだけではなく、こういった風に変えていかないと続かないという意見もあると思うが、そのような議論の場があればあるほど、本日のような議論をした意味がある。それは、基本構想全文を読んでもらうというより、自分の好きな京都と掛け合わせて、議論してもらうことによって、広がりが初めて生まれる議論だと思う。

最後に、基本構想の内容やこれまでの経過を知らない中で恐縮だが、もし可能であれば、本日の議論を聞いて佐藤氏から一言いただけないか。

佐藤氏

強い言い方になるかもしれないが、「伝える」ということを少し甘く考えているのではないだろうか。それほど簡単なことではないと思う。最終的には、この基本構想を周知することが目的か。

松井市長

京都市役所の立場から言うと、読んでもらう努力はしなければいけないが、正直なところ、基本構想を全て読んでもらうのは難しいと思っている。しかし、これを１つのきっかけに、京都のことを考えていただきたい。だから、基本構想を啓蒙普及や周知徹底するなど、上から下の流れではなく、これを題材にして、それぞれの人が思っている好きな京都を、どうしたら残せるか、より良くできるかということを議論していただきたい。

佐藤氏

巻き込みという形に近いと思う。やはりトップダウンで伝えていく時代ではなく、また情報もコンテンツもメディアも多過ぎるので、冷静に考えて伝わっていく時代ではない。だから、伝え方は変化しており、私たちが伝えたいことではなく、相手が聞きたいことを言わないと絶対に入っていかない。相手が聞きたいように翻訳をする必要がある。そのように考えた時に、３つ足りないことがあると思う。

１つ目は、伝えたい言葉がないということ。例えば、私が誰かに伝えたいとすると、陳腐な言葉でないと伝えられないが、伝えたい言葉になっていない。「京都基本構想」という言葉もそれだけではよく分からない。

２つ目は、伝えたい人が誰か分からないということ。伝えたい人が誰で、どのように伝わっていくかというイメージができていないと、やはり人には伝播していかない。

３つ目は、伝えたい感情を作らないと、人は誰かに言わないということ。語り部がいても、そこで一回止まってしまうと思う。伝えたいことはたくさんあり、聞いていると素晴らしいと思うが、相手が聞きたいように、要素をもう一度作り直さなければいけないと思った。

「京都基本構想」という言葉は決まってしまったのかもしれないが、例えば「次の１００

０年構想」のようなシンプルな言葉にして、それを伝えたい人を作るためには「１０００年１０００人」というように、１０００人をとにかくピックアップし、１人は銭湯を語り、１人は駄菓子屋さんを語り、１人はぶぶ漬けを語るなど、テーマは何でも良いが、１０００人がそれぞれ自分の周りの人を巻き込めるようにするといったことも考えられる。

そして、自分が言いたくなるためには、その「１０００年１０００人」に選ばれているという何かがないと、やはり言いたくならない。そのような仕組みを作り、宣言することで、巻き込まれていること自体が活動になり、その１０００人の一人一人が持っているマイクログループに対して語っていく。それがきちんとサイトなどで可視化されたり、街中にポスターで一人一人が貼られたり、京都のまちで何かが行われていると皆が少しずつ気付くので、そうなると人に言いたくなったり、聞いてみたくなったりする。急に基本構想を聞きたい人はいないと思うので、とにかく入り口のハードルを下げて、伝えたい言葉、聞きたい言葉にして、しかも１０００人が参加しているのは何だろうと気になるような仕組みを作らないと人に伝わらないし、伝えたくないし、伝わっていかないと思う。

ファンがいるとは思うが、ファンもいろいろなタイプがいるので、急に語り部になることは難しいし、こちらから押し付けることではないと思うので、「１０００年１０００人」のようなフィールドを用意し、参加しやすくして、興味を持ってもらうことが重要だと思う。

また、この基本構想をどこからどう読めば良いか分からなかった。目次に、「２１世紀の到来」と「都市の理想」という言葉があったので、都市の理想を語っていくのだということは分かった。どこかに「超長期」という言葉もあったかと思う。

松井市長

「超長期」という言葉は、この未来共創チーム会議の議論から出てきた言葉である。

佐藤氏

京都にしかできないことなので良いと思う。基本構想の内容はシンプルではないと思うが、「超長期に都市の理想を語る」のように伝えやすい言葉にしないと、人には伝わっていかないのかと思う。その言葉に仕組みが入っていると良い。

松井市長

基本構想という言葉は行政用語である。総合計画審議会では、内容について議論しているが、それをどう伝えていくかというのは、未来共創チーム会議が中心となって考えていただきたい。皆さんのような若い世代が語り継がなければ意味がないので、初めて基本構想を読んだ佐藤氏の率直な感想や意見を含めて、基本構想の使い方を議論していただけると良い。実際に１０００人集めるとなると大変かもしれないが、１００人でも良いから、基本構想を題材に、各々のテーマで自分の好きな京都をどうするかというように議論していただくだけでも非常にありがたいことである。それは、ここで出た問題意識そのもので、２５年などと言わずに、１０００年先を考えるくらいの野望を持とうということである。

佐藤氏

１０００年と言えるのは京都だけだと思う。

―休憩―

司会

先ほどまでの議論を踏まえて、掘り下げたい部分などあれば、そこから議論を再開したいと思うがいかがか。

大竹委員

佐藤氏の話をそのとおりだと思いながら聞いていた。やはり抽象度が高く、様々な想いが込められた文章ではあるが、誰かに伝えるためには、簡潔でメッセージ性がはっきりしていることが重要であると改めて感じた。「１０００年」というキーワードが出たが、基本構想の中で簡潔に伝えたいメッセージは何かと考えてみても良いかもしれない。松井市長からの話で、名称は「基本構想」となっているが、その伝え方はいろいろ形があって良いということだったので、従来の形にこだわらず自由な発想で考えていきたい。

杉田委員

佐藤氏の話の中で、相手は聞きたいことしか聞かないという言葉が印象的であった。一方で、私たちも言いたいことしか気持ちを込めて言えないところもあり、そう考えると、「X」は一人一人に帰属するものかと思う。

最近、「自分のことを３つの単語で表すとこれ」という単語を名刺に書いている人とよく出会うことがあり、自分の場合はどの単語を選ぶかということを考えている。例えば「木こり、雪山、ランドスケープ」や「ベトナム、建築、電気」を選んでいる人がいる。そういった自分にとってパーソナルなトピックであれば、熱意を持って話すことができるし、伝えたい言葉や伝えたい人も見つけることができると思うので、具体的な言葉でも抽象的な言葉でも良いが、やはり「X」は可変であるべきという話に戻るのかと思う。

知ってもらうというのは、トップダウン的な印象で、その部分がどうしても気になる。そのような形で知ってどうなるのかという感じにもなるので、突き詰めていくと「X with 基本構想」は、対話や発話のきっかけを市民と共につくり出すことが重要だと思う。例えば「銭湯 with 基本構想」とした場合に、基本構想を知ってほしいからといって、トップダウンに基本構想について何か読んでもらうというよりは、銭湯についてどのような課題意識があり、京都という場所と紐付けて、どういった場所づくりが必要なのかという議論を引き出せるような場を作りたいということではないだろうか。対話や発話のきっかけになるような方向でもう少し議論ができると良いかと思う。

田口委員

私も同様の意見であり、先ほど How について問われたと思うが、そうではないのではない

かと思った。どちらかというと、基本構想という情報があり、何らかの手法に乗せて届けるということではなく、基本構想をきっかけにその周りでぐるぐる回っていること自体を伝えるということで、そこは切り離せないのではないだろうか。

都地委員

「京都基本構想」は、京都たらしめるディテールのようなものであり、伝えたい言葉がなかったり、伝えたい人が誰だか分からなかったりするという話もあったが、それは「X」に関連して知ってもらうものではないかと思う。基本構想は中核であり、中核の内容を詳細に知ってもらうことを目的とするのか、それとも、それぞれの人たちに対して「X with」という形で知ってもらうことを目的とするのかということによっても、方向性が変わってくるのではないだろうか。京都について、より深く知ったり考えたりする中で、京都基本構想に辿り着く方が、内容に共感してもらいやすいと思う。

田口委員

都地委員の話のとおりであり、悪い意味ではなく、別に「京都基本構想」自体を伝えなくても良いと思っている。伝えることに主眼があるわけではなく、銭湯であれば銭湯についての議論が生まれ、先ほど私がカルチャーと言ったが、実際どうしようかという動きに繋げるために、基本構想をどのように使うのかという話だと思う。

池坊委員

「興味の仕組み化」というワードがずっと頭に残っており、正論だとは思うが、京都基本構想を非常に推す人はほとんどいないのではないか。推しやすいものは、抽象化や理想化され、捨象しているところがたくさんあると思う。それが聞きたい言葉を聞くということかもしれないが、京都基本構想は、Who や How という次元ではなく、Why の部分でなぜこの構想を問うのかというところに意味があると思うので、内的な活動のような気がする。そういった意味では、考えること自体や、それを内面化することに一番価値があるのではないだろうか。

銭湯の文脈が基本構想にあることを知ったとしても、だからといって、その人が基本構想を PR する必要はないと思う。そのことを知った後にこれまでと変わらず、銭湯に通ったり、あるいは銭湯の営業を頑張ったりするだけで、基本構想を背景に行動していることにつながると思う。つまり拡散ではなく、一人一人が考えることに重きを置いた方が良く、考えることでその一部が、次の波紋に繋がるかもしれないが、これまでこのチームで議論してきたことを踏まえると、波紋を全員に起こすことを目指さない方が良いと思う。

大竹委員

佐藤氏は、この基本構想を伝えることを目的としているのであればという前提で、きちんと伝わるまでのプロセスを明確にする方が良いと話していたと思う。しかし、本日ここまでの各委員の意見を聞いていると、伝えることが第一の目的としていないように思う。

先ほども対話のきっかけになれば良いという意見が出ていたが、基本構想がどういった目

的で策定され、京都でどのような存在になってほしいのかということを、再度、全員で共通認識を持つことができると、具体的に何をすべきなのかというものが見えてくるように思う。私の中ではその部分が定まっていないので、どうすべきなのかという部分も不明確である。

伊住委員

私も同じ意見で、松井市長が話していたように、議論のきっかけになればそれで良いと思う。この基本構想に掲げる理想を２５年先も守っていくということではなく、京都市の理想としてこのようなたたき台ができたと捉える方が良いのではないだろうか。そこから議論が始まり、もう少しこうではないかというものが出来上がれば、またそれに付随するように議論が生まれる。そういったことが積み重なっていくことが重要かと思う。

先ほどの「１０００年１０００人」のアイデアに関しても、基本構想について思うところがそれぞれに出てくるはずであるから、数珠つなぎのように、自分の仕事にとってはこのフレーズが非常に重要であるとか、反対にこういった視点が抜けているという意見を様々な業種の人から集めておくと、２０５０年に振り返ることができ、新しい構想を作る際の参考になるかもしれない。

そういった意味では、京都基本構想の内容を何かメッセージとして伝えるというよりは、基本構想を話のネタにしながら対話していくことが重要である。次の２５年間を共に走りながら考えていく幹のようなものだと考えると良いのではないだろうか。

池坊委員

議論ができる同じ京都という場所に、みんなが立っているということが一番重要なのではないか。こういった基本構想を２５年ごとに更新して作っていくことがなければ、議論があちらこちらに飛んでしまい噛み合わない。様々な異なる意見がある中で受け継いでいき、意識していなくとも、京都という輪の中に関わり、互いに自分の意見を言い合える土俵に立っていることに意味があると思う。

大竹委員

伝えるだけであれば、伝えるとそこで終わってしまうが、議論のきっかけを目的にするのであれば、その先１００年でも続いていくと思う。基本構想をきっかけに、自分にとって京都とはどういった存在なのかと考えることが、京都に愛着を持ったり、京都に住み続けたいと思うことに繋がるのではないか。私たちは文章を作ることではなく、京都に対して何らかの想いを持ってもらうきっかけを作ることを目的にしていたと思うが、文章が完成しつつある中で、伝えるか伝えないかということに意識が向いてしまっていたと感じる。

西田都市経営戦略監

これまで松井市長と話す中で思ったことも含めて少し話をさせていただく。未来共創チーム会議の議論においても、基本構想はゴールではなく、スタートをデザインするという話があったように、この基本構想が策定された時点が、２５年後の基本構想を作るスタートにな

れば良い。
　この基本構想について議論していただく中で、ゴールはないと思っている。それは、総合計画審議会において、推敲を重ねても「こういったことが足りないのではないか」、「もっとこのような観点が必要ではないか」という様々な意見があり、我々自身がそれを一番感じている。だからこそ、松井市長は基本構想をたたき台にして、皆さんに議論してほしいという思いを込めて、最後に「未来への問いかけ」を付け加えようとした。
　この基本構想をベースに２５年後の基本構想作りをスタートしていくようなつもりで、この基本構想が活用されていくと、皆さんの考えに近いものになるかと思う。

伊住委員
　「with 基本構想」ということで議論してきたが、これまでの話を聞いていると、「Start from 基本構想」の方がイメージに近いのかもしれない。「with」であれば、基本構想とずっと共に歩んでいくように感じるが、起点と考えるのであれば「from」だと思う。最初に大井委員が話していたような、いつの間にか触れているようなものをイメージするのであればまた異なる単語になるかもしれないが、「with」で良いのか疑問に感じた。

大井委員
　この基本構想には私たちがこれまで議論してきたことが含まれているということは前提としているが、この基本構想を広めていこう、普段から話そうと本当に思うかというところが、私の中で非常に引っかかっている。前回の未来共創チーム会議の場で、基本構想を読んだ率直な感想として分かりにくいと言ったが、どういったところが分からないのかと逆に問われてしまったので、私だけそう感じているのかと委縮してしまったが、やはり分かりにくいと思っている。
　京都市としては、今後、基本構想をベースに具体的な施策を進めていくことになると思うが、どれほどの職員が内容を理解して業務に反映できるのかイメージできない。基本構想を読んで、現在取り組んでいる事業はこの部分に関係しているということは分かるかもしれないが、「この部分にこう書いているから、こういった施策を実施していこう」とは、なかなかならないと思う。そういう部分にずっともやもやしている。
　トークセッションで何かを伝えることも１つの方法だが、「この部分が分からない」、「これは何なのか」などというところから共感を得る方法もあるのではないだろうか。必ずしもポジティブな意見ばかりではないと思うので、反対意見や分からないという意見も含めた対話の場にしたい。

杉田委員
　まさにそのとおりだと思う。具体的な政策にどのように接続されるのか、その議論がどのように行われていくのかという点は、市職員の皆さんとしても、もやっとされることもあると思う。私たちが、市民に伝えてほしいと言われたとしても、「ここにはこのように書かれていて、だから」という説明になってしまう。具体的な政策の部分についても、この場で議

論したかったが、基本構想ということでそれはできないということは理解している。
　だからこそ、「X with 基本構想」には希望があると思っている。大竹委員が話していたように、これをきっかけに京都を考えることになり、基本構想の中にはこういった言葉が使われているという話をするのではなく、例えば銭湯や空き家のような、具体的な政策レベルで考えるべきトピックや、個人的に興味のある宗教などのトピックを、京都に紐付けて考えてみるきっかけづくりになるような対話の場を、いろいろな人たちと作ることができると、具体的な政策や私たちの日々の活動にも繋がっていくかもしれない。

仲田委員
　基本構想は、それぞれが大切にしたいものを大切にするために何をすべきか考えるためのものかと思ったので、「X with 基本構想」が起点だとすると、その「X」に自分の感情が惹かれる何かが入り、そこから実行に変わっていく、もしくは「京都発展構想」のような形になっていく物語なのかと思っていた。始まりの「X」が地図上の最初の座標のように見えてきた。

三川委員
　私も皆さんと同じような考えで、基本構想そのものを伝えたいというよりも、あくまでレファレンスができる文書の１つでしかないので、内容を一生懸命に伝える活動が語り部の活動ではないと思っている。単純に、なぜ京都が好きなのかという会話をするだけでも、十分に基本構想に関連した活動と言えるのではないか。本日の会議の冒頭に行った個別対話も、その１つである。雑談をする中で、例えば銭湯が好き、タイに行ったという話の延長として、なぜ今京都に住んでいるのかという質問に派生していくだけで、基本構想に触れている気がする。あまり難しく考え過ぎなくて良いと思う。
　最近、X（旧 Twitter）で話題になっている「友人の鴨川デルタでの過ごし方、優雅すぎる」という投稿があるが、こういった投稿をきっかけに、「自分も鴨川でこのように過ごすのが好き」、「これはとても良い。どこなのか」と会話が広がり、京都に対する愛や理解が深まるような気軽な活動で良いのではないだろうか。

仲田委員
　基本構想について議論したいというよりも、議論の起点となるものとすると、基本構想の使い方が難しくなった。

伊住委員
　ただの雑談で終わってしまうという危険性もある。

司会
　次のテーマで議論する時に、その辺りが入口になるかもしれない。

事務局

雑談だけで終わることなく、基本構想とどのように絡めていくかという点は、３つのテーマを連動させて考えていただけたらと思う。

―休憩―

司会

それでは、ここからはまちなか広報物及び特設サイトの取組を中心に議論していきたいと思う。まず、資料２の５ページ目を御覧いただきたい。

（資料に基づき説明）

これまでの説明を聞いて、感じられたことがあれば教えていただきたい。

池坊委員

先ほどは、コアなファンになり得る２割にアプローチするという話があったが、全く興味がない人のきっかけになることも重要だと思う。案として提示されているものは広報するためのアプローチという印象が強く、例えば「人間性を恢復できるまち？」と記載しているステッカーが電車の窓に貼ってあるからといって、そのことについて電車の中で考える人はあまりいないと思う。素材は基本構想で良いがもっと超越するようなもので、なおかつポップさが必要である。若いクリエイターやものづくりに携わる方々に、基本構想をイメージして弾けたものを作っていただくことも良いかと思う。大阪・関西万博ではミャクミャクの靴下やＴシャツが人気だったり、一時期、東南アジアなどでは「極度乾燥Ｔシャツ」が流行していたりしたが、そうした身に着けたくなるようなものであれば、それを通して自然と広がっていくかもしれない。

杉田委員

複数の若手クリエイターとコラボレーションして、自由に基本構想を表現してもらうとグラフィックで表現する人もいれば、工芸品で表現する人もいたりして面白いと思う。直感的である必要があり、何か情報を伝えるというよりもムードを伝えることができないと届かないと思っている。例えば、タイでは政府が野焼きを禁止する政策を打ち出した時に罰金を科しても効果が無かったが、政府が占い師を雇い、野焼きをすれば呪いをかけると言うと効果があったという話がある。極端な例だが、直感的にムードが伝わるものを作るのが良いと思う。

大竹委員

二次元コードを読み込んで最初に表示される内容が非常に重要だと思う。基本構想の文章が表示されても読み進めようとは思ってもらえないので、ランディングページの作成にもク

リエイターに関わっていただき、未来共創チーム会議における議論の中で出てきた「０．１市民」や「京都教」といったキャッチーな言葉も入れたりするなどポップさが必要である。
　さらに、若い世代は読むだけではなく自ら書き込むことができる方が、受け入れられやすいと思う。参考１のサイトイメージのようなきちんとした文章もサイト内にあっても良いが、最初に表示されるページはもっとポップな方が良いと思う。

都地委員
　広報物に関して言うと、FOREVER21 というアパレル会社がバッグやシャツに「ヨハネによる福音書３章１６節」と英語で書いているものを出している。欧米ではキリスト教徒の割合が多いため、このバッグやシャツを見て聖書を見ようとする人たちが多いと聞く。聖書を引用するこの手法は参考にできるかもしれないと思った。

池坊委員
　ランディングページとするかどうかは別として、基本構想を作り続けてきたことを伝えるページは絶対に必要である。このような基本構想があり、それを基に行政が様々な施策を展開していることや、２５年前にも作っていたことを知らない人が多いと思う。次の２５年を展望する基本構想を皆で作っており、その輪の中にあなたもいるということをしっかりとストレートに言うことが重要である。その部分は皆が合意できる点ではないだろうか。
　京都に何らかの縁がある人がそのページを訪れるということなので、それが一番大きな共通項になるのではないかと思う。先ほど言っていた議論のスタートであり、同じ土俵に立つということでもある。

大井委員
　遷移した先で簡易バージョンのページなのか、エピソードベースなのか、本文をきちんと載せているページなのか、各自で選択できると様々な人に見てもらえると思う。程度の差はあっても、最終的には基本構想の中身に少しでも触れてもらいたい。

司会
　ここで特設サイトに持たせたいと考えている機能について、もう少し詳しく説明させていただく。参考１を御覧いただきたい。

（資料に基づき説明）

田口委員
　市民はどういったモチベーションで基本構想を読むのかと考えていた。市政に関心があるという理由はすぐに思いつくが、それは恐らく２割の人だけである。市政に関心があるわけではない残りの８割の人が読む理由は、簡易版の内容が面白いから、もしくは読まざるを得ない程重要であったり、役立ったりするからかもしれない。そう考えた時に、開催予定のイ

ベント情報を掲載することは良いアイデアだと思う。
　ゲンロンという会社が全国の人文系のイベントを時系列に掲載する「人文ウォッチ」というウェブサイトを運営している。人文系のイベントに興味のある人が人文ウォッチのサイトを知り、そこからなぜこのようなことをやっているのかと興味を持つ人がいると、ゲンロンという会社の情報にたどり着くと思う。そういった順序で基本構想にたどり着く方法もあるのではないだろうか。つまり、こちらが伝えたいことから考えるのではなく、読む側がなぜそれにたどり着こうと思うのかと考える必要があると思う。例えばイベント情報の中に、基本構想のこういった理念に基づいて開催するというようなことが書いてあると、そこから基本構想の内容にたどり着くかもしれない。

仲田委員
　短時間でできる京都基本構想の性格診断のようなものがあっても面白いと思う。「あなたは基本構想の第３章何々だ」と言われると、どういったことが書かれているか気になるのではないか。

都地委員
　交通局のアニメキャラクターのように擬人化という手法もあると思う。

事務局
　技術的にはAIを性格診断に活用することは可能である。実装するに当たっては、どういった要素があるとこのような性格になるというパターンをいくつか考えるという作業が必要になる。それができると後はAIに学習させるだけである。

大井委員
　そもそもウェブサイトにたどり着くまでのハードルはなかなか高いので、SNSの方が良い場合もある。実際に京都市の事業でSNSとホームページの両方を運営していた時に、SNSは広告を打つことによってある程度誘導することはできるが、ホームページに訪れてもらうことが難しいと実感している。京都市公式noteに池坊委員や伊住委員の記事が載っているので、そういったところから基本構想にたどり着く方法もあると思う。

杉田委員
　冊子や印刷物は作成されるのか。

事務局
　今年度中に完成するかは別として、概要版や簡易版など複数種類作成する予定である。

杉田委員
　参考１のサイトイメージは、興味のある要素をクリックするとこれまでの議論の経過を

参照できるので非常に良いと思う。こういった解説付きの読み方はぜひ実現させたいと思っており、さらに感想などを書き込む機能もあるというのは素晴らしい。以前も紹介したと思うが、日本国憲法とアートを組み合わせた本とイメージが近いと思う。その本には日本語と英語で条文が書かれており、行間に注釈が添えられ、条文に関連するアート作品も掲載されている。これを参考に、基本構想に関連する場所の写真なども載せると読み進めやすいのではないだろうか。

ランディングページに関しては、階層が深くなればなるほど読んでもらえなくなるので、しっかりとデザインされたものであれば参考１のサイトイメージにいきなり遷移しても良いと思う。イベント情報や Podcast はポップアップをクリックすると遷移するようにしても良い。

仲田委員

結局、誰がどういったフックにかかるかということによってアプローチが異なる。ランディングページを訪れた人に何を期待するのかによっても異なると思う。

都地委員

共通して言えることは、きちんと何かしらの形で、いろいろな人たちが目にする機会をどれだけ増やすことができるかというところが重要ということである。京都で何か新しく創りたい、提供したい、守りたいなど様々な想いを持つ人に知ってもらうために機能させたいと思う。

池坊委員

ランディングページを経て、特設サイトの深層に向かっていく直線的な構造に少し違和感を覚える。カジュアルなページや性格診断、クリエイターが作るものも基本構想で、一方当然基本構想の本文も基本構想であり、その２つの柱のどちらが偉いということではないような気がする。往復できる構造にすると、陶芸やポップな形などで基本構想を体感したり楽しんだりすることができる。本文を掲載する場合でも、完成された正解の文章という感じではなく、気になる一節をクリックすると、議論の過程で抜け落ちたりあるいは採用されたものが表示されるなど流動的な基本構想の姿を見せる方が良いと思う。

仲田委員

確かに行き来することで内発的な動機が生まれてくるかもしれない。

田口委員

私はこのサイトイメージを見て、文章を上から下までというより適当にランダムに表示するのかと思っていた。

杉田委員

まちなか広報物に基本構想はこういったことだと書かれていても誰もスキャンしないので、例えば京都の若手のクリエイターが作った直感的なビジュアルがあると興味を持ってもらえるのではないだろうか。スキャンすると基本構想とその解説が表示されると読んでもらえるかもしれない。

仲田委員

タイトルは隠しておいても面白いかもしれない。日本人はアートを楽しむ時になぜかタイトルばかり見ると言われているので、隠しておいてスキャンすると実は基本構想だったと分かると趣があって良いと思う。

大竹委員

おみくじのように同じ二次元コードを読み取っても、毎回表示される内容が変わると他の内容も気になって読みたくなるかもしれない。

司会

これまでの議論をトークセッションやワークショップ等とも連動させて実施していきたいと考えているが、その辺りについての御意見は何かあるだろうか。

池坊委員

様々なトークセッションがあると思うが、トークセッションだけではない方が良いと思う。お茶やお花でも、関係するいろいろな人の網の目があるので、そういった体験型の取組や京都のいろいろな場所を巡るツアーを開催しても良いかもしれない。トークセッションという同じ型で人とテーマが変わるだけというのは面白くない。例えば、「心の御土居」という言葉が出てくるのであれば、実際に全ての御土居を訪れてみたり、以前三川委員が話していた南禅寺の三門を訪れてみたりすると良いのではないかと思う。

都地委員

良さが分かるためには共通言語が必要だと思うので、同じ目線に立つことが重要である。各業界において共通言語があると思うので、そういったところから京都の良さに繋げられたら良いと思う。

杉田委員

登壇者によるトークイベントは一方向的なコミュニケーションになってしまうので、これまでとは少し異なる対話の場をつくりたいと思っている。「水中の哲学者たち」という本の著者は、定期的に皆で顔を突き合わせて１つの問いを３、４時間かけて深掘りする哲学対話を開催している。この基本構想に必要なことはトークセッションではなく、市民と市職員が同じ場にいる対話だと思う。

様々な市民が集まると苦情や要望も出てくるかもしれないが、そういった声を拾い上げて基本構想やその先の具体的な政策に繋げていくことが、市職員の皆さんのミッションだと思う。多くの市民は話を聞きたいのではなく、聞いてほしいのではないだろうか。基本構想をきっかけにそのような場を作っていただきたい。

市民の声を聞く中で、そういった話は実は基本構想の中にもこのような表現で書かれていると紹介できると良いと思う。

仲田委員

基本構想をきっかけに仲間探しができると良いと思う。例えば、銭湯に関わる人が自分の活動と基本構想を紐付けると、９つあるめざすまちのすがたのうち、この部分をこうしていきたいというものが見えてきた時に、実は全く異なるジャンルの人も同じようなことを目指していると分かると、仲間になって何かしようとなるかもしれない。

伊住委員

市バスの中にステッカーを貼るのも良いと思うが、京都の名所と言われるような場所に月替わりで若手クリエイターがデザインしたものを展示するのも良いと思う。

他にもネットユーザーが面白がって取り組めるものがあると浸透していくのではないだろうか。例えば、上の句と下の句を複数の人が詠み連ねていく連歌のような形式で、有名無名を問わず様々な人が京都の風景にちなんだ歌を詠み連ねるプロジェクトが２５年間続くと、一定浸透したと言えるかもしれない。

司会

それでは時間となったので、最後に西田都市経営戦略監から、一言御挨拶をいただきたい。

西田戦略監

本日も長時間にわたり御議論いただき感謝申し上げる。基本構想の文章は審議会において練られるものであるが、それをどのように解釈し、共感の輪を広げていくのかということに関しては、本日のように自由な発想で取り組んでいただきたいと思うので、引き続きお願い申し上げる。

司会

以上をもって、第８回京都市未来共創チーム会議を閉会とする。